

(6) 20年度のまとめ

ア 事後研より

授業者の感想

- ・ 交流し合うことで視点が広がった。
- ・ 実態に合わせて作成した教材で関わったところ、子どもの実態が予想を超えてはるかに高い面を持っていたことに気付いた。一見したところどれだけの力を持っているか分かりにくい子どもに、できるだけ迫れるよう、力量を高めたい。
- ・ 子どもの持っている力への洞察が深まった。
- ・ 体操など身体的なものや違い、教材・教具は具体物なので、誰でもその個に対して使うことが出来る可能性がある。指導の可能性が広がる。
- ・ カードという残ししやすい形にしなが、担当が代わっても、彼らの使っている教材・教具の引継ぎという視点を忘れず、繰り返し使っていけるべきだろう。

参観者の感想

- ・ 自立活動の中身は、「教科の時間では追求しきれない内容で一番身につけさせたいこと」とすると分かりやすいのではないか。いろいろなことにチャレンジしてほしい。
- ・ 今認識することが困難と思われる側面(色、形など)を無視せずに、教材作りの視点にもりこむべきだろう。
- ・ 教材に伴う光や音の量も十分な配慮が必要。適度な量により子ども達は安心して楽しめる。
- ・ 手作りということで、内容や教材そのものに夢や温かみがある。そのことは保護者の喜びにもつながるだろう。

イ まとめ

多様な実態がある中で、その児童生徒に合ったものを提示するには、その素地として、的確な実態把握や力を引き出そうという指導者の意欲が不可欠である。今回教材・教具の定義や開発の視点について確認し合い、作成発表することによって、児童生徒の新たな力を見出し、見逃していた視点に気づくことができた。また、その教材を使ってさらに意欲的に授業を進めていくことができた。教材・教具を介して児童生徒と指導者相互の力をより引き出せるよう、今後も工夫、開発していきたい。

4 2年間の研究のまとめ

(1) 成果

重度肢体不自由という実態から「身体の動き」を特に大切にしてきた中で、自立活動の考え方を論議し、整理した。自立活動はすべての教育活動に含まれることや、心身の調和的発達を目指すものであり、内面の育ちも同じように重視したいという思いを再確認した。今回、児童生徒の持っている力や興味関心から内容を組み立て表に整理したことで、個別の指導が充実した。また、自立活動の5つの区分にねらいを位置づけることにより、評価の視点が明確になり、次の指導に生かすことができた。さらに、自立活動のねらいにせまる教材・教具を工夫・開発し、ねらいや成果と課題等をカードにまとめたことで取組を共有化することができ、互いの実践から広く学ぶことができた。

(2) 今後の課題

児童生徒の実態に寄り添い、自立活動のねらいや取組を常に見直し共有化していくことが大切である。同時に、作成した教材・教具について記録に残し、円滑に引き継いでいくことも課題である。これらの積み上げがまさに子どもたちのQOLを高めていくのではないかと。

この5年余りの間に重心教育部の実態やその環境は大きく変化した。小学部への入学が増え、低学年時期に視点を置いた研究や環境設定が急がれる。病棟での生活という環境条件も持ちながら、自立活動を通していかにコミュニケーションの力を豊かにし、保護者の願いに寄り添っていくのか。また、多様化する障害への理解と支援など、学校に託されているものは大きい。特別支援学校となり、今後一層教育部としてのまとめと、一人一人の自覚、そして力量が問われると考える。